

【まちづくり事例集】

参加がひろがる知恵袋



刈谷市共存・協働のまちづくり推進委員会

はじめに

【刈谷市が目指す共存・協働のまちづくりとは】

市民、地域団体、市民活動団体、事業者、教育機関等、それに行政が、暮らしやすく心の通ったまちにしていくための課題を「自分ごと」としてとらえ、お互いを尊重した上で、目標を共有しながら、知恵や力を活かしあい、「対話」「理解」「共感」を大切にしながら取り組むことです。

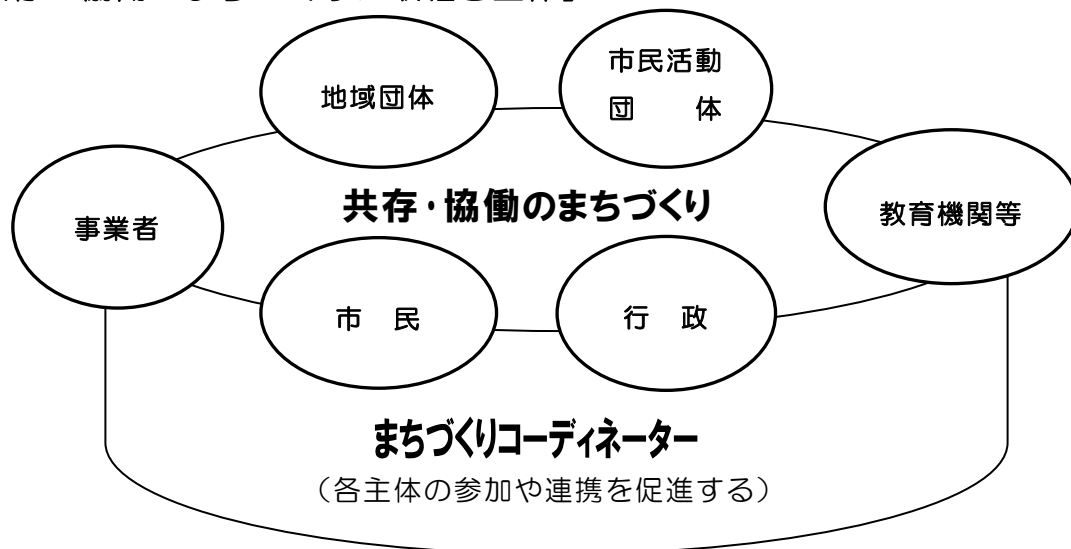
共存とは・・・

年齢・性別・国籍・障がいの有無といった一人ひとりの違いや、さまざまな考え方や活動・組織の存在を認め合って、多様性を大切にすることです。

協働とは・・・

同じ目標を達成しようとする者同士が、各々の考え方や行動の仕方が違って、お互いの特性を活かし合って、協力することです。

【共存・協働のまちづくりに取り組む主体】



【参加がひろがる知恵袋を作成した目的】

共存・協働のまちづくりを推進するため、刈谷市共存・協働のまちづくり推進委員会では、様々な主体を結び付ける役割を担う人である「まちづくりコーディネーター」の育成について意見交換をしてきました。

まちづくりコーディネーターについては、育成講座の開催や現場での実践を通じて少しずつ前に進んできたため、次の段階として、多様な人々がまちづくりに参加するための「環境づくり」が必要であるということになりました。

この知恵袋は、多様な人々がまちづくりに参加している事例をまとめることで、各種団体がイベントや行事を行う際の「環境づくり」のヒントとして活用いただくことを目的に作成しました。なお、今後も事例を追加していくことにより、活用の幅を広げていきたいと考えています。

目 次

【事例1】住吉小学校宿泊式避難所体験 1
 【主催】教育機関等

【事例2】東刈谷地区わいわいフェスタ&盆踊り 3
 【主催】地域団体、事業者

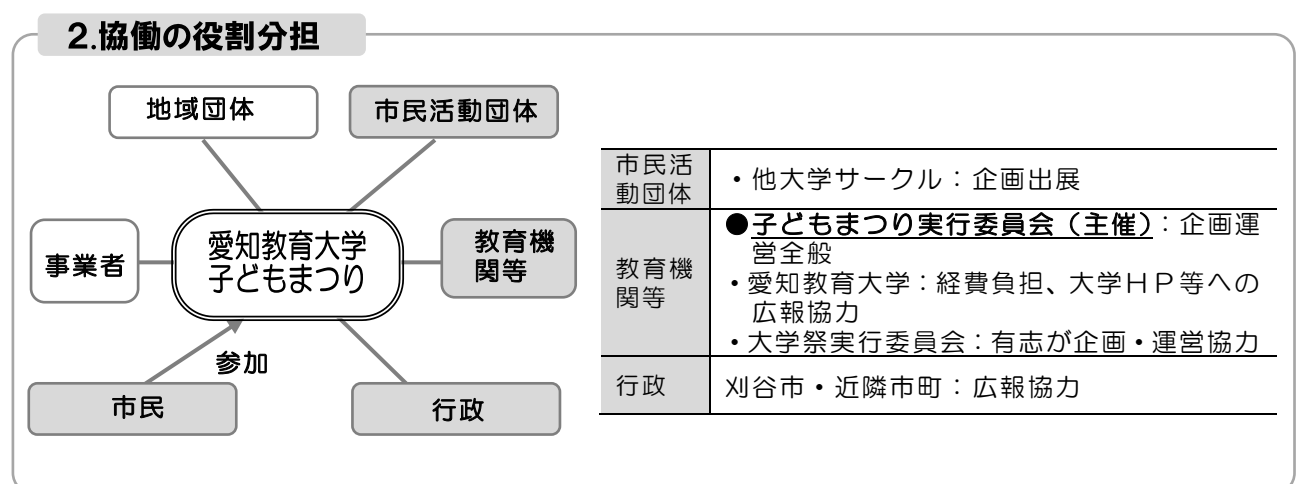
【事例3】愛知教育大学子どもまつり 5
 【主催】教育機関等

【事例4】ふれあい泉田朝市 7
 【主催】地域団体

【事例5】ワールド・スマイル・ガーデン 9
 【主催】市民活動団体

<各事例に記載のある協働の役割分担の見方について>

左の図では、共存・協働のまちづくりの主体を示し、事例に協力した主体を網掛けとしました。右の表では、協力した各主体の名称と役割について、記しています。



住吉小学校宿泊式避難所体験

1.活動概要

刈谷市立住吉小学校では、4年生を対象に、体育館で一泊して防災食や避難所づくりを体験する防災訓練を毎年夏休みに行っている。講話や話し合いで構成され、防災クイズ・炊き出し・役割班ごとの体験活動から、被災地支援などの講話までさまざまな学習・体験が行われる。赤十字奉仕団の他、地域の防災に関わる人材・組織に協力を得て実施されている。



▲避難所体験の様子



▲体験型講話を行う赤十字奉仕団

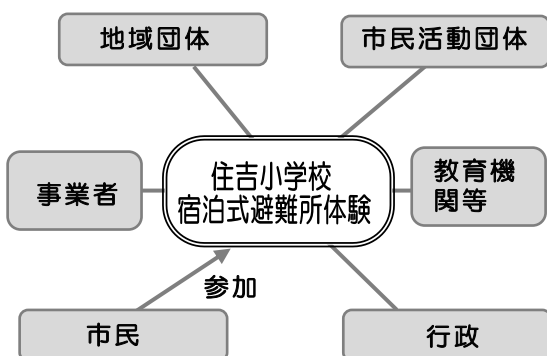
<活動目的>

宿泊体験を通して防災について学び、災害に備える力を高めること。

<背景・経緯>

平成 23 年 3 月の東日本大震災を機に、翌 24 年から 4 年生を対象にした夏休みの学習活動として開始した。当初、市危機管理課から助言を得て準備を進めた。また、赤十字奉仕団（日本赤十字愛知県支部、刈谷市赤十字奉仕団）から、さまざまな指導・協力を得ている。定番になったプログラムと、毎年内容を検討してつくるプログラムとがあるが、後者は、関係する先生がもつネットワークにより、赤十字奉仕団の他に、消防署、支援ボランティア活動体験者など臨場感のあるお話ができる人材を探しながら企画運営をしている。

2.協働の役割分担



地域団体	・市婦人会：防災クイズの運営
市民活動団体	・赤十字奉仕団：炊き出しについての講話、救助法等の体験型プログラムの運営
事業者	・地元企業：炊き出し訓練用のアルファ米の提供
教育機関等	●住吉小学校（主催）：全プログラムの企画・運営（4年生の担任、総務、養護教諭中心）
行政	・危機管理課：避難所についての講話・助言（初期） ・消防署：消火訓練（初期）

※協働のあった主体を網掛けで示しています。

3.多様な参加の広がり

実施時期は夏休みであるが、同小4年生のほぼ全児童が参加している。保護者は部分的に講話を聴講できる。また、平成28年度は、市婦人会生活文化委員が防災をテーマにした活動を行った経緯から、「防災クイズ」の講話を受け持つ運びとなった。



なるほどー！
そうだったのかー！

<多様な人々のまちづくりへの参加の促進の工夫>

- 子どもたちに災害時における役割を設定している（「ボランティアセンター」「住居」「衛生」「炊き出し」「救護」の役割班を持って体験・話し合いをする）。
- 地域性を重視した実践的な訓練形式にしている（子どもたちは、クラス毎ではなく、住んでいる場所によって実際に災害時に避難する避難所毎に班を編制して行動する）。
- 保護者の方のご理解をいただいております、夏休み期間にも関わらず、欠席者もほぼ無く、学習活動として無理なく根づいている（①5年生が行う「みどりの学校（宿泊研修）」に先立つ宿泊体験である。②総合的な学習で「防災」を学んだことが反映できる）。
- 大人の防災意識づくりの場にもしている（①父母も希望者は講話を聴講できるようにしている。②子どもが親に報告し、大人の意識が高まることが期待できる）。
- 学校が赤十字に加盟していることを活かし、赤十字関係者に協力の要請をした（刈谷市内の全小学校は赤十字に加盟している）。
- 市婦人会生活文化委員の活動の平成28年度のテーマが防災で、三河地震等を調べたことから、せっかくなので子どもに伝えようと小学校に申し出て実現に至った。市婦人会としても、子どもたちと触れ合える貴重な場であり、今後も継続したい意向を持つ。
- 炊き出し訓練用のアルファ米について、以前は市より提供されていたが、今年度、地元企業に頼んだところ、協力していただくことができた。

<苦労した点>

- 「創意ある学校づくり」の事業として、予算を計上するため、状況に応じた変更等がしにくい。
- 避難所体験に適した講師を探すのに苦労をしている。
- 刈谷市赤十字奉仕団（30名）・市婦人会（10名）に多大な協力をいただいているが、無報酬で心苦しい。

4.今後に向けて

- ・内容を工夫していく上で多様な講師の情報が必要になるので、困った時は、市民ボランティア活動センターで地域の防災団体について情報を得ることも考えたい。
- ・災害時は、住吉小学校も避難所になるため、いざという時の避難所運営に、体験で学んだことが少しでも力になることを期待したい。

（●レポート作成：平成29年2月）

（●ヒアリング協力者：住吉小学校教頭 黒田保彦氏、刈谷市婦人会連絡協議会会長 都築楓氏）

地区と商店街が諸団体と協力して開催する

東刈谷地区わいわいフェスタ&盆踊り

1.活動概要

東刈谷地区は、平成 27 年に新たな行政区になったのを機に、昼間はイベント・夜は盆踊りを行っていた催しに、「防災」の要素を組み入れ、商店街や学校など協力の輪を広げ、「わいわいフェスタ&盆踊り」として野田公園で開催している。

楽しみながらも「共同体意識」が芽生える場となるよう、子どもから年配者まで異なる世代が交流できる工夫がされ、平成 28 年は 2 日間で延べ 2,500 人が集った。



▲子どもの出演で子育て世代も多数来場



▲防災のクイズ・体験ができるブース

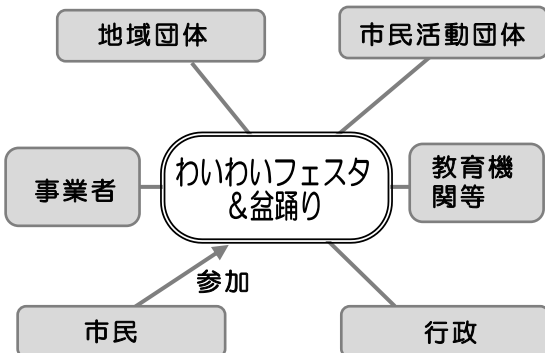
<活動目的>

住民が盆踊り等を楽しみながら、共同体意識・防災意識を高めること。

<背景・経緯>

東刈谷は転入や転居をしてきた住民が比較的多く、「新しい住民に参加してもらい、自治会との接点を持って欲しい」、また、「災害時に、まず生きていないと近所で助け合うこともできない」という自治会長の想いが発端となった。自治会長を含め 6 人の役員会で話し合いを重ね、「多様な人が参加する」「防災について頭に残る」イベントとして練り上げ、多様な団体に役割分担を呼びかけて実施している。

2.協働の役割分担



※協働のあった主体を網掛けで示しています。

地域団体	●東刈谷地区（自治会、公民館）（主催）：企画運営全般、防災クイズラリー本部 ・自主防災会：公園内防災設備（カマドベンチ・簡易トイレ等）の開示、家具等固定方法展示 ・消防団：水消火器体験 ・子供会、婦人部、防犯パトロール隊、青年団：当日運営等
市民活動団体	・赤十字奉仕団：応急救護説明と体験
事業者	●東刈谷商店街協同組合（主催）：広報物印刷、会場設備手配 ・NTT西日本：災害伝言ダイヤル模擬体験
教育機関等	・東刈谷小：プラスバンド、和太鼓演奏 ・東刈谷中：当日ボランティア派遣
行政	・公園緑地課：使用手続 ・危機管理課：助言 ・東刈谷交番：警備手続

3.多様な参加の広がり

ちらしを新聞に折り込み、回覧、商店街での掲示で展開し、参加者数は2015年度1,000人⇒2,500人に増えた。ステージに小学校のブラスバンド等の出演を得て、子育て中の若い世代、防災や盆踊りになじみの薄い人たちや新しい住民への参加促進に取り組んでいる。



なるほどー！
そうだったのかー！

<多様な人々のまちづくりへの参加の促進の工夫>

- 多様な世代が触れ合えるように、ステージで行われるプログラムの順番を工夫している。
(例；子育て世代が集う小学生ブラスバンド演奏 ⇒皆で防災訓練 ⇒高齢者も楽しめる津軽三味線の演奏)
- お盆休みではない時期に開催時期をずらすことで、新しい住民も集まりやすくした。
- 子ども会に入っていないなくても、分け隔てなくイベントが楽しめるようにしている。
- 会場内に、クイズや体験ができる7か所の防災ブースを設置(救助法、家具固定、非常用持ち出し品等がテーマ)。5か所以上を回ると景品がもらえるといったスタンプラリーで参加を促している。
- 学校を通して中学生ボランティアを募り、当日の運営ボランティアをしている。
- 商店街に、カラーちらし作成の他、ステージ・テントの設置費用を協力してもらっている。商店街にとってもよいPRの場になり、WIN-WINの関係でコラボしている。自治会の印刷物をお願いする等、普段のお付き合いがあったため、協力依頼が円滑に進んだ。
- 各団体が集まる実行委員会を行わず、役員会が企画・調整の核になり、準備プロセスの中での協力団体の負担を少なくしている。
- 具体的なプログラム、会場整備をお願いする時間区分等を役員会側から示し、「役割を明確に」「大きな負担をかけない」形をお願いした。ただし、お願いした部分は「任せるよ」という形にする。各団体は快く協力してくれた。
- 役員間も、それぞれのアイデアを出し合って取り入れるようにした。「せっかくやるんだから、自分たちも楽しむ・遊ぶ気持ちを持とう」という姿勢で進めた。

<苦労した点>

- 地区委員会の準備をする役員会(月例)で話し合いを重ねたが、役員会以外でも情報交換を随時する等、構想を練るのに目に見えない時間がかかっている。

4.今後に向けて

- ・役員が変われば、内容も新しい役員で工夫してもらえばよいと思っているが、防災は大切なテーマなので続けて欲しいと考えている。
- ・回を重ねるとイベントはマンネリ化しがちである。常に新しい工夫をして、参加した人が「こんなことを感じた」と、何か持ち帰られるものがある内容にと願っている。

(●レポート作成：平成29年2月 ●ヒアリング協力者：東刈谷自治会長 渋谷福治氏)

実行委員会と共に、当日ボランティア、他大学サークルが力を合わせてつくる

愛知教育大学子どもまつり

1.活動概要

愛知教育大学の学生が子どもと触れ合い、一緒に楽しむ催しで40年以上続いているお祭り。5月・12月と年2回開催され、300～400名の子どもたちが参加している。集まった子どもと学生はグループをつくって、ロケットやバルーンアートなどの工作、ミニゲーム、踊りやオカリナ等も体験できるたくさんの企画を回って楽しむ。同大1～2年を中心とする30名ほどからなる実行委員会が主催している。



▲たくさんのレクリエーションを用意



▲ダンボール工作の様子

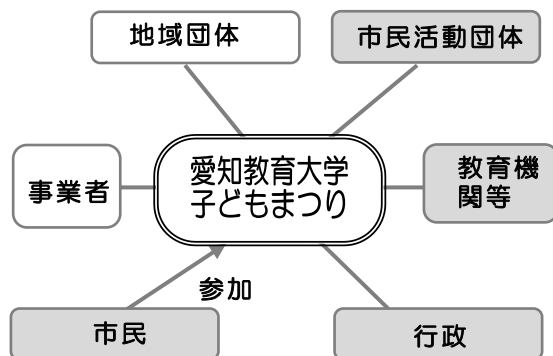
<活動目的>

教員を目指す学生がまつりの企画・運営を通して子どもと触れ合う経験を積むこと。

<背景・経緯>

愛知教育大学は教員を目指す学生が多いが、教育実習等がない1～2年生の間は子どもと触れ合う機会が少ない。そこで、子どもに関わる経験を積んでもらうことを目的に行われている。始まった当初は、日常的に子どもに関わるサークルが多くあり、それらを土台にまつりがつくりあげられていた。長年続く同大学で行われている行事として定着している。

2.協働の役割分担



市民活動団体	・他大学サークル：企画出展
教育機関等	●子どもまつり実行委員会（主催）：企画運営全般 ・愛知教育大学：大学HP等への広報協力 ・愛知教育大学後援会：経費負担 ・大学祭実行委員会：有志が企画・運営協力
行政	・刈谷市・近隣市町：広報協力

※協働のあった主体を網掛けで示しています。

3.多様な参加の広がり

当日は、小学校1～6年を中心に、300～400名の子どもが参加する。子どもまつり実行委員会以外に、大学祭実行委員会の有志約20名、当日子どもと遊ぶ参加者兼ボランティア30余名、企画出展をしてくれる他大学のサークル（愛知大学、中部大学、名古屋女子大学、愛知県立大学）の力が合わさって、子どもまつりが実施されている。



なるほどー！
そうだったのかー！

<多様な人々のまちづくりへの参加の促進の工夫>

- 子どもへのPRは、愛知教育大学に近い小学校にちらしの配架をお願いし、個別に呼びかけを行っている（刈谷市、知立市、みよし市、豊明市、豊田市、東郷町）。
- 子どもの嗜好も変化するので、実行委員会が行う企画は、時代に応じた内容になるよう話し合っている。最近は、少し競争的な要素があるミニゲームが人気である。
- かわいい飾りつけでいっぱいにして、いつもの大学と違う楽しい雰囲気づくりをしている。
- 親が安心して子どもを預けられるように、工具の使い方等、安全面には気を配っている。
- 実行委員の募集は4月頃に行っている。
- 実行委員は自然に巻き込む流れを意識している（例；4月の新入生歓迎時に「一度、飾りつけ作業を見にこない？」と話しかける。来てくれたら「企画も一緒にしてみる？」とより深い関わりを呼びかけている）。
- 当日子どもと遊んだ参加者兼ボランティアがまず楽しむことができ、「この楽しさを他の学生にも体験してほしい」と、次回の実行委員になってくれる展開を意識している。
- 子どもと接する経験を積むことが趣旨なので、子どもとよい形で関わられたかをしっかり振り返る。「達成感」が得られることが、担い手を確保することにつながる。

<苦労した点>

- 実行委員が減る傾向にある（平成28年度は増）。企画の話し合いと、飾りものの準備で活動日がほぼ毎日であり、学生にとって時間の調整が大変な面もある。毎年、新しい実行委員を確保していく必要があり、少し不安を感じつつ呼びかけているのが現状である。
- 子どもの参加者数も、以前は700～1,000人位いたが減ってきている。子どもの人口が減ったこと、遊び方が多様になっている影響があると思われる。

4.今後に向けて

- ・子どもと触れ合う機会が少なくなってきているので、教員になりたい学生にとっては子どもと接する貴重な場として、続いていくことを願っている。
- ・学生が経験を積むことを中心に考えており、現状は地域の子育てサークル等とあまり連携できていない。しかし、子どもまつり以外で子どもと接する経験を積む機会も大切であり、地域の子育て団体等の情報を知っていくことも、今後のテーマのひとつである。

（●レポート作成：平成29年2月 ●ヒアリング協力者：子どもまつり実行委員会委員長 中村恒毅氏）

住民有志で新しい住民・多世代とのつながりをつくる

ふれあい泉田朝市

1.活動概要

泉田町では、地域住民同士のつながり・ふれあいを深めるため、毎月第4日曜日の午前8時から朝市を行っている。場所は、新しい住民が多く暮らす地区の八王子神社で開催。地元で取れた野菜や果実を軽トラックの荷台で販売し、喫茶コーナーではコーヒーの販売を行い、語り合いの場を提供している。また、子どもが楽しめるレクリエーションを取り入れるなど、多世代交流にも力を入れている。



▲子どもが楽しめるレクリエーション



▲軽トラックの荷台で農産物の販売

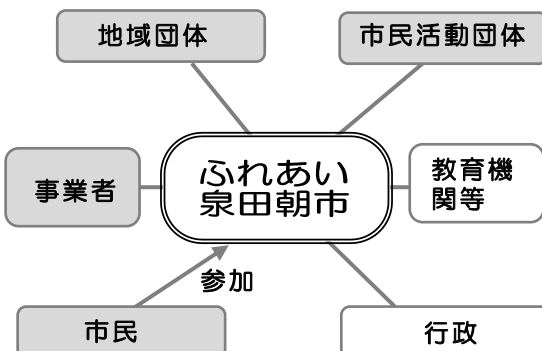
<活動目的>

住民同士、多様な世代間のつながり・ふれあいを深めること。

<背景・経緯>

泉田地区には、約 2,508世帯 5,987人（平成29年2月1日現在）が暮らしているが、高齢化が進み、平成28年2月に町内唯一のスーパーが閉店し、買い物に困る人が増えた。事態の改善や交流の場が失われることへの懸念から、同年3月に住民有志 33人が「ふれあい泉田朝市会」を結成。4月から、毎月第4日曜日に、地産地消の朝市を開催することとなった。「物品の販売以上に、住民同士のふれあいを強めたい」という思いもあった。

2.協働の役割分担



地域団体	●住民有志（主催）：出店、準備・運営（地区役員経験者、家庭菜園を行う人等33人） ・自治会：広報協力
市民活動団体	・primam（手芸グループ）：出店・広報協力
事業者	・八王子神社：場所の提供

※協働のあった主体を網掛けで示しています。

3.多様な参加の広がり

朝市には、200人から300人もの人が訪れ、境内には人々の会話や笑い声が響いている。子ども連れの家族から高齢者まで幅広い層の参加が見られ、回を重ねるごとに、参加者も増加している。また、新しい住民の方の参加も少しずつ増加してきており、手応えを感じている。



なるほどー！
そうだったのかー！

<多様な人々のまちづくりへの参加の促進の工夫>

- 地区役員経験者が中心となって運営している。役員経験者であるため、回覧板などを通して地域への周知を図ることがスムーズにできる。他方で、現役地区役員が当日の運営を行う形ではないため、役員の負担増にならず、地域を盛り上げる活動ができている。
- 有志の中で、農家や家庭菜園を営む人が新鮮な野菜を安価に提供する形で、買い物の場がなくなったという問題に対して、できる所から取り組み、地域に明るさを生んでいる。
- 新しい住民が参加しやすいよう開催場所を工夫した（町の中心地ではなく、新しい住民が多く住む場所にある八王子神社で開催）。神社も場所の提供に協力してくれている。
- 開催日を固定し、認知度を高めると共に、当日は、宣伝カーを走らせている。
- 物品の販売だけでなく、多世代がふれあえるような工夫をしている（子ども向け＝宝探しゲームやバルーンアート等のレクリエーションを行う。大人向け＝コーヒーやお漬物を提供する喫茶コーナーを設け、語らいが生まれるようにする）。
- 主催者が、バルーンアート・手芸・漬物の提供など、特技を活かし楽しい場をつくらしている。その気持ちが訪れる人の笑顔を引出し、開催日を毎回楽しみにしている人も多い。
- 回を重ねるごとに出店数が増え、豊富な品揃えにより、常連さんも増えている。
- 手芸の好きなお母さんたちのグループが出店すると同時に、ブログやfacebookで予定や報告を毎回発信し、若い人に向けた広報の役割を果たしている。

<苦労した点>

- 当初は商品を集めるにも一苦労で、売れ残ったらどうしようという不安もあった。
- 商品の陳列方法や会場レイアウトは、朝市の後に行う反省会で話し合い、改善している。

4.今後に向けて

- ・平成28年4月に始まった新しい活動であり、1年やっていく中で、もっと活気が出るだろう。とにかく、地域の皆さんがにこやかになることが大事だと考えている。
- ・当初目的としていた新しい住民の参加がまだまだ少ないため、継続的に活動を行ってきたい。運営側のメンバーが負担に思わず、楽しめるような環境作りをしていきたい。

（●レポート作成：平成29年2月 ●ヒアリング協力者：岡本辰男氏）

住民有志が主体となり、外国人・日本人が集まり、交流する農園をつくる

ワールド・スマイル・ガーデン

1.活動概要

一ツ木地区では、多文化共生を目的とし、多様な人々が集まれる場所として、ワールド・スマイル・ガーデン（コミュニティガーデン：地域みんなの庭）を開設した。畑では、農作物を作り、田んぼでは、米作りを行うなど、多国籍、多世代が交流できる場となっている。また、季節に合わせたイベントを行い、毎年10月に行う収穫祭には、50人以上の参加がある。



▲収穫祭には、多数の外国人も参加



▲地区の運動会に多文化共生チームとして参加

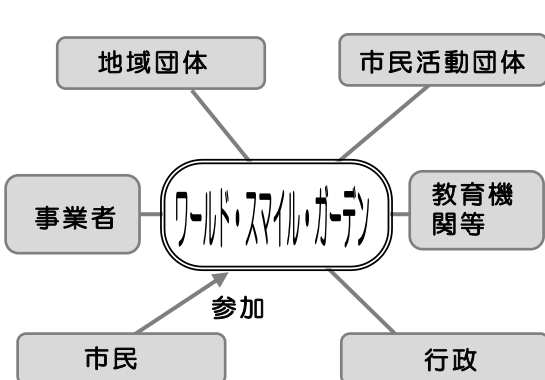
<活動目的>

国籍、世代に関わり無く交流でき、顔の見える関係を作ること。

<背景・経緯>

愛知県国際交流協会からの提案が発端となり、市が一ツ木地区に声をかけ、協働で一ツ木地区コミュニティガーデンを開設することが決まった。一ツ木地区に決まった理由としては、市内で外国人住民が最も多く、多文化共生事業のモデル地域となっていることからである。開設するにあたり、地区の理解を得ることが必要なことから、自治会、婦人会、子ども会に説明会を行い、参加者を募った。現在では、地区役員等も含む実行委員会形式の任意団体ワールド・スマイル・ガーデン一ツ木として運営されている。

2.協働の役割分担



※協働のあった主体を網掛けで示しています。

地域団体	<ul style="list-style-type: none"> 自治会長：自治会との連携調整 公民館長：公民館との連携調整
市民活動団体	<ul style="list-style-type: none"> NPO法人NIED：企画会議の進行 (公財)愛知県国際交流協会：企画・運営・広報 ●任意団体ワールド・スマイル・ガーデン一ツ木（主催）：企画・運営・広報
事業者	<ul style="list-style-type: none"> (株)豊電子工業：従業員のイベント参加 愛知技研(株)：従業員のイベント参加
教育機関等	<ul style="list-style-type: none"> 平成幼稚園：園児・保護者への広報
行政	<ul style="list-style-type: none"> 市民協働課：企画・運営・広報

3.多様な参加の広がり

地域住民だけでなく、近隣の市町からの参加もあり、広範囲の交流が生まれている。また、多国籍、多世代の参加者がいることにより、お互いの違いや新しい気づきを認識できる場となっている。一ツ木地区にある企業の外国人従業員や研修生の参加もあるため、地域と企業のつながりもできている。



なるほどー！
そうだったのかー！

<多様な人々のまちづくりへの参加の促進の工夫>

- 実行委員会形式にし、企画会議は、住民主体で実施されている（実行委員会の中には、自治会長や公民館長だけでなく、地区役員経験者も参加している）。
- 平日の夜の実行委員会に参加できない住民もいるので、気軽に意見を言えたり、企画に加わったりできるプチミーティングを合同作業日（草むしりなど）の後に行っている。
- 広報チラシを多言語化（5カ国語：日本語、英語、中国語、ポルトガル語、フィリピン語）し、配布している。
- 近所の幼稚園で子どもの食育・教育の視点を踏まえ、広報を行っている。
- イベント開催時に企業に対して広報を行い、外国人従業員や研修生の参加を呼びかけている。
- 外国人住民の参加を増やすため、参加いただいた外国人に様子や感想をフェイスブックに母語で発信をしてもらっている。
- イベントなどへの参加費は、無料としている。
- 収穫祭では、収穫した作物を一緒に料理し、食べる機会を設け、参加が広がるようにしている。
- 一ツ木駅及び市民館から近く人が集まりやすい場所にコミュニティガーデンを開設している。

<苦労した点>

- イベント当日に参加いただける外国人はいるが、企画会議へも参加いただける方がなかなかいないため、広報の方法を考えるのに苦労した。
- 限られた資金の中で、農作業やイベントを開催したので、各団体のメンバーが持っている器具や道具を持ち寄った。

4.今後に向けて

- ・自治会に所属していない外国人への広報を工夫し、収穫祭などのイベント当日だけでなく、企画会議から参加してもらえるようにする。
- ・安定した運営をできるように、資金の循環の仕組みを作りたいと考えている。

（●レポート作成：平成 29 年 2 月）

（●ヒアリング協力者：任意団体ワールド・スマイル・ガーデン一ツ木会長 近藤重光氏）



<共存・協働のまちづくり推進委員メッセージ>

どの事例にも共通しているのは、「目的がしっかりしていること」、「それに対して本当にやろうと思っている人、リーダーがしっかりと取り組んでいること」があります。全ての事例が好事例だと思いました。

まちづくりに参加している人がこの事例を読むと、関係者が“自分ごと”としていることがよく見えてくる気がしました。自分たちがやらないとできないぞという思いを持っている人たちが大切だと思いました。

自分の知らないところで、多くの人が刈谷市のため、みんなが豊かになるためにという思いを持ち、活動してくださっていることがよくわかり、この活動が、様々な人に伝わると良いと思いました。

このような事例が多くなれば、気持ちが豊かな住みやすいまちづくりになってくるのではないかと思います。こういう活動がずっと受け継がれば、ますます刈谷のことが好きになるきっかけになるとと思います。

地域の人材には様々な人がいるので、一緒になって、行事を広げていきたいと思いました。地域の様々な人に話を聞いて、それぞれの人々が持つ強みを知る機会を増やしていきたいと思いました。

「継続する」ということは非常に重要なことだと思います。しかし、ただ同じことをするのは、なかなか続きません。そういう意味で、自分ごとにする人が前面に出て行くと上手くいくのではないかと思います。

今回の事例にもある地域の知らないおじさんやおばさん、年上の大学生のお兄さんやお姉さんに会って色々教えてもらい、刺激をもらうことは子どもたちが育っていく上でとても良いことだと思いました。

どの事例も苦労はすごくあるかと思いますが、目的をもってやろうという気持ちがあるので、上手くいっているのだと思います。思いを形にしている発想が素晴らしいと思います。

「参加がひろがる知恵袋」

平成29年2月 初版発行

発行・問い合わせ先：刈谷市役所 市民活動部 市民協働課

編集：刈谷市共存・協働のまちづくり推進委員会（運営協力：NPO法人ボランタリーネイバース）
〒448-8501 刈谷市東陽町 1-1

TEL：0566-95-0002 FAX：0566-27-9652 mail：kyodo@city.kariya.lg.jp

URL：<https://www.city.kariya.lg.jp/kurashi/shiminkyodo/kyosonkyodo/khyozonkyodosuisin/20170316194424034.html>